不思議の国と。-少女と不思議な物語-

鳴瀬　凛琥.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議の国と。－少女と不思議な物語－

【Ｎコード】
Ｎ５７５９Ｗ

【作者名】
鳴瀬　凛琥・

【あらすじ】
「どこへ行くの？」
少女は問うた。
兎は無視して駆けていく。
少女はまだまだ追い駆ける。
「うさぎさん、つかまえた」

兎に追いつき、周りを見渡すと其処は、
何処か遠くの世界、異世界だった。

「その世界」は、赤の女王、青の帝王、黄色の姫が
支配している世界。

そして、少女ーアリスーは、「その世界」での生活をはじめ、
暮らし始める。

不思議の国と。ー少女と兎ー

「どこへ行くの？　うさぎさんっ」

兎は無視して駆けて行く。

必死で追いかける少女は、やっとのことで
追いついて兎にまたまた問うた。

「どこへ行くの、って聞いてるでしょ！」
「・・・・おまえ、どうしてここに入れるの？」

気がつくと、少女――、
［アリスーＡｌｉｃｅ／Ｗｏｎｄｅｒ］
アリスは、『穴』に入っていた。

「ここは、何？」

椅子や机、本に絵画、他にも色々浮いていて、
壁は何でできているかすらわからない、
紫色に赤、青、黄色の薔薇模様。

そして、アリスのような人間は居ない。
兎ばかりが居るのだ。
それに、さっきまで離せなかった
兎とも話せるようになっている。

「ここは――、兎の穴。
　兎しか入れない。

ここには、あの『赤の女王』も、
言い成りの『青の帝王』も、
その子供の『黄色の姫』さえも入れない。

どうしておまえは入れる・・・・？！」
「そんなの知らないわよっ！
兎さん、貴方の名前を教えて頂戴？」

「俺の名前はラビット。だから何だよ」

ラビットは、不機嫌そうな顔をし、名前を答えた。

「へえ、ラビット！　そう、ラビね？
私の名前はアリス・ワンダー！
アリスって呼んで頂戴？」

ラビ　と呼ばれたあと、
兎はとても不機嫌そうな顔をした。

「おまえも俺をラビって呼ぶのか。
まあ・・・いい。　おまえは何だ？
本当に、人間なのか？」

アリスは兎に問われると、答えた。

「人間よ？　ココの世界じゃない、人間。
その貴方が言う女王様や帝王様、お姫様とは違う種族だけどね。
異世界から来た、人間よ。

返りたい、けど、ココでも楽しいし。
帰っても――、楽しく、ないから」

そして、浮いていた椅子に座り、
兎に触れ、撫でた。

「・・・まあいい。
おまえは危害を加える人間でも無いようだしな」

「ねえ、その女王様の所へ案内して頂戴？」
そうアリスが言うと、兎は驚いた顔をした。
そして、言った。

「その前に、そろそろ夜が来る。
夜が来る前にこの穴を抜けないと・・・。
此処に居ていいのは、兎だけだからな。
夜には監視人が見に来る。
来い、俺の家に泊めてやる」
「そうね、有難う。エスコートして頂戴」

アリスと兎は駆けていった。

不思議の国と。ー少女と兎ー（後書き）

有難う御座いました★！、

不思議の国と。ー少女とチェシャ猫ー（前書き）

2話です＊、
これからは前書きも書こうと思います・・・w

不思議の国と。ー少女とチェシャ猫ー

「ふあ・・・眠・・・
・・・あ、そいえばラビ、のお家に
泊まった、んだった、わね・・・眠・・・・」

昨日のこと。

『そういえば、あなたのお家は兎のお家、
小さいの？』

アリスは問うた。

『普通の大きさだ。』
『普通が判らないの。教えて頂戴』
『教えなくてももう着くから良いだろ』

『ええ・・・そうね』

そして、着いた先にあったのは、アリスの元居た世界と
同じくらいの家、であった（見た目は少しファンタジック）。

『あら・・・意外と大きいのね？』
『だから普通だって言ったろ、』

『・・・入っていいの？』
『ああ』

『・・・お邪魔します』

で、普通に泊まったんだったわね・・・、

「お、起きたのか？　アリス嬢」

「・・・？　アリス嬢？　アリスと呼んで頂戴？」

アリスは、きょとん。という顔をした、

そして、ラビはため息をつき、説明。

「此処での仕来りだ。　異世界の者とか、

高貴な者、それに、客人には持て成せと。

まあ、おまえだからいいか」

するとアリスは、むっとした顔をし、

言った。

「私だからって何よ、ラビ。

まあ・・・いいわ。

出かけましょう、女王様のところへ」

「腹は減ってないのか？」

「ええ」

「・・・・・・・じゃあ行こうか。」

「・・・」

「・・・ラビ？」

ラビは、アリスに背を向けて黙り込んだ。
そして、

『ぽん』、

と気の抜けた音とともに、
白い煙の中から、人間の美少年・・・？が、
現れた。

「んーっ！　・・・・・・・・できた、」
「あ、え？　ど、どちら様？」

「ああ、おまえは見たことないんだったな」
「え？」

「俺はラビだ。　・・・此処はおまえの元いた世界じゃない、
こういう事もよくあんだぞ」
「あ・・・ええ、了承したわ」

なんとか納得をした（？）アリスとラビは、
城まで向かった。

「此処は・・・何処？」
「森の中さ。怖いのか？」

ニヤニヤしながら兎は問うた。

少女は答えた。

「そんなわけ、な・・・」

［オジョウサン、ソノウソハドコカラクルンダイ？］

人を馬鹿にするような、男か女か、
果たして生物ですらあるのかわからない、
そんな声が聞こえた。

「・・・・！　誰？」

［モリノナカ・・・森の中。　森の王さ、死者の使者、
　オマエはどこの奴だ？］

声がだんだんはっきりしていき、
その【声の主】はアリスに問うた。

「私は・・・異世界の人間よ」
［ほう・・・それは興味深い。　一度、触れてみたい、
　・・・・調べてみたい］

アリスは強く強調し言った。

「嫌よ。　姿を見せなさい」
［強気な少女だこと・・・　面白いわね？］

「（・・・口調と声が変わった・・・？！）」

［あら・・・気づいているんでしょう？］

［言ってもいいんだぞ？］

２つの声はアリスを誘うように言い、
アリスは１歩後ずさった。そして、
もう一度問うた。

「・・・・・・どこにいるの？」

「ここよ」

「ここさ」

「・・・！」

後ろを振り向くと、小さな女の子と男の子が立っていた。
紫と薄紫の縞模様の猫の耳に、尻尾。

「・・・・・・・・・猫？」

「そう、私達はチェシャ猫なのよ」

「そう！　俺たちはチェ者猫なのさ」

二人は声を揃えて言った。

アリスは、気難しそうな顔をした。

「・・・・・そう、私は女王様の所へ行くの。
邪魔をしないで頂戴・・・？」
「嫌だわ、邪魔なんかしてないわ！」
「嫌だね、邪魔なんてしてないさ！」

「・・・なあ、お前達、好い加減にしたら如何だ？」
今まで散々放置されたラビが、怒ったように言った。

「どうしたの、ラビ？　何の話？」
「くす、酷いわねラビ？何の話よ？」
「むう、酷いなあラビ？何の話だ？」

「・・・・・・・・・はあ・・・。
お前ら、お菓子食うか？」

「え？　ついていけないんですけど・・？」

「！　欲しい欲しい欲しいわ！」
「！　欲しい欲しい欲しいぞ！」

双子の猫は、ラビから貰った飴を食べると・・、
ラビが人間の姿のときになった時と
同様、気の抜けた音とともに、煙から猫が2匹、
出てきた。

「・・・・・・・・・みあ」

「・・・・・・・・にゃあ」

アリスは、体を少し震わせて、言った。

「・・あら？」

「こいつらは通行人に悪戯をする、
性根の悪い只の猫だ。
チェシャ猫は、気を惑わすのが得意だからな」

「・・・・・・・そう。・・・・・・・・・・」

「ん？　・・・怖いのか？」

にやにやラビが問う。

「・・んもう！違うわよっ！　・・か・・・可愛いんだものおおおおおっ！」

アリスが大声で叫んだ。
ラビは、こんな顔→（，・ω・、）になって答えた。

「・・・ソウデスカ」

「・・・・・まあいいわ、行くわよ。」
アリスはそう、クールに言ったのだが、その
腕の中には確り2匹の猫が抱かれていた。

「・・・え、そいつら連れて行くの？」

「当たり前でしょう！　こんな可愛い生き物なのよ？！」

「は・・・ハイ」

アリスはご機嫌、兎は悩み顔。
女王の所へつくには、まだまだ時間がかかりそうだった。
2人と2匹は森を抜けて、進んでいった。

不思議の国と。ー少女とチェシャ猫ー（後書き）

※後書きでは、本作品2話の内容に触れております故、
ネタバレにご注意ください。

2話がやっと完成・・・！
なかなか思いつかず、苦労しました。

2話から女王と会うのも何だと思い、
チェシャ猫を入れました。
次には、帽子屋と三月うさぎ入れたいな・・・、

少女とお茶会、かな。

にしてもチェシャの双子は描いてて楽しいです。
似たような台詞がお気に入り。

多分、性格は女の子の方が気が強いんだろうなあ。

3話をお楽しみに★！、

不思議の国と。ー少女とお茶会ー（前書き）

こんにちは、氷羽　紫苑です！
氷羽　密華でもいいかなとか思ってるのは秘密。

お茶会です、
ウサギと帽子屋とのお話。

不思議の国と。ー少女とお茶会ー

「♪～♪～♪」
「・・・・・・・・・・あ、アリスさん？」

「・・・・ハイ？　何よ」
「いや、チェルシーとシャルがさあ？
抱きしめすぎてやばいことになってね？」

アリスの腕に抱きしめられた2匹の猫・・・
メスがシャル、オスがチェルシー。

「へえ・・・シャルとチェルシーって言うの？
このコたち」
「ああ。　・・・じゃなくて、」

2匹は、抱きしめられすぎて、
ぐったりしていた。

「これ、食わせろ。」

ラビがアリスに向かって丸い何かを投げる。
「あ・・・これ」
そう、2匹が猫になった時の飴、だ。

「ど、どうぞ。」

2匹の口に入れる。

ぽん。

「あ、アリス・・・君は怖い人だな！」
「あ、アリス・・・貴方怖い人だわ！」

「えええ・・・いいじゃなあい・・・可愛いんだものお・・・」

「むぅ・・」
「ぶぅ・・」

2人は頬を膨らませ、可愛く怒ったが、
アリスはそれを無視して進んでいった。

アリスは、その目の前の高級食器、机、そして、ケーキ。
倒れた椅子、壊れた食器、ウサギと帽子の男二人。

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・　アリス？」

「貴方達は？　何方？」

「なあ、ウサギよ、オマエは如何思う？」
「ああ、帽子屋。オモシロイんじゃないか？」

「・・・・誰ですの？」

アリスはいらいらしたようにもう一度問う。

「アリス、俺はウサギ、３月ウサギの鎌。」

「ワンダー嬢、始めまして。私は帽子屋。　ハイトです。」

ウサギはそっぽを向き、帽子屋は腰を折る。

「レンにハイトだったわね。

・・・・・・・・どうして私の名を？」

「ウワサ、ですよ。　ワンダー嬢？」

「ああ。そこのチェシャとか、華とか、木とか、風とかからだぜ。」

アリスは吃驚した様な顔になり、

「・・・・・・・・シャル、チェルシー・・・・？」

「いやーん、ばれちゃった！　てへっ★」

「ちぇーっ、ばれちゃった！　てへっ★」

「て、てへっ★　て・・・・んもぅ・・・・誤って頂戴！」

アリスは呆れ顔、ラビは笑っている。

「お、お前らいつの間に・・・ぷ・・・・くすっ・・・・」

「ら、ラビッ！！・・・・むぅ・・・・」

アリスは顔を真っ赤にして怒った。
そして、２人の方を見る。

「・・・・も、しかして・・・」
「ああ、おまえが異世界の人間だって事、兎の穴に入れたって事、」
「くらいなら知っていますよ？」

それを聞いたアリスは、しゃがみ込んでしまった。

「・・・・・ああ・・・大変、如何しましょうお母様・・・
私は異世界に来てまで噂にヒットしてしまいましたわ・・・」

「まあ、いいんじゃありませんか？気軽にしていけばいいんですよ？」

「ハイト・・・有難う、そうね、私は今のことだけ考えて、
気楽に行きますわ！」
「アリス、おまえ、そろそろ時間がヤバいんじゃねえの？」

「・・・あら。そうね、
では・・・レン、ハイト――」

「――ワンダー嬢？」
「・・・なぁに？」

「お茶を飲んでいきませんか？
時間を止めるお茶・・・とか」

「・・・・・！　そんなものあるの？」
「ええ、勿論。貴方が望むのなら」

「じゃあ・・・少し、飲んでいきましょう」

――そして、お茶をすっかり飲み終えたアリスは、
満足げに言った。

「・・・・有難う、美味しい紅茶だったわ」
「そうですか．　有難う御座います、ラビ。時間は大丈夫？」

アリスは立ち上がり、ラビに向いた。

「余裕だっつーの。　お前、時間巻き戻しただろ。」
「あれ？　僕間違えた覚えはないけどなあ」

「・・・あら？」

アリスが、かばんの方を見ると、２匹の猫が寝ていたのだ。
時間が・・・戻った。

「・・・にぅ・・・」
「・・・にぁ・・・」

「・・・あら。　まあいいわ。ハイト？

礼を言うわね、有難う。

レン、ハイト、さようなら」

「ええ、・・・ワンダー嬢。またのお越しを」

「じゃーな、アリス。　・・・・・・・また来い」

アリスとラビ、2匹は、もう城が見える位置に居る。

さあ、女王とのご対面だ！

不思議の国と。－少女とお茶会－（後書き）

有難う御座いました。
次回、女王とアリスご一行（ｒｙ
は出会うのですが、女王の性格が○○なわけです。
ああ、恐ろしい。

次回をお楽しみに.

不思議の国と。ー少女と女王ー（前書き）

こんにちは、氷羽です。
更新遅れてごめんなさい；；

なかなかこの続きどうしようかって悩んでまして・・・苦笑。
最初は、４話完結の予定だったんですけど、途中からキャラと設定増やして、路線を変えたんです。

なので、最後まで是非お楽しみ下さい。

※５話完結ですので、次回が最終話となります。

不思議の国と。ー少女と女王ー

４人は歩いた。
歩いて歩いて、辿り着いたのだ、

女王の住む、お城に。

と　こ　ろ　が　？

「きゃ？　きゃ、きゃあああああああああああああっ！」
「「「アリス――ッ？！」」」

アリスが、落ちた。
アリスたちが歩いていた道・・・に、
突如　［超次元空間］　、所謂兎の穴と同様、
決められた者だけが入れる穴が開いた。

そこに、落ちた。

「・・・・・・・・どうする、お前ら」

「どうする、って勿論」
「どうする、って勿論」

「助けに行く、って、判ってる、だろっ？」
「助けに行く、って、判ってるでしょう？」
「・・・・・・・・ああ、勿論」

―アリスサイド―

きゃ・・・っ、
「此処――どこなの？」

ウサギの穴？違う！
歩いていて落ちたんだもん、

『ねえ・・・おまえ、だあれ？』
「？！　・・・貴方は、誰？」

『私は・・・女王。とでもいえばいいのかしら？
おまえは、だあれ？』
「・・・・・・女王様・・・・・・？！」

うそ、うそ、うそ！
どうして・・・？

「私、は、アリス・ワンダー。」
『・・・』

「貴女が［穴］を造ったの？　私を・・・落としたの？」
『ええ』
・・・・・・なんで？
何故、私？
「どうして？」
『興味があったのよ』
「・・・何故？」
『質問ばかり、面白くないわ』
「じゃあ、此処から出して頂戴」
『・・・・・・　・・・・・・クス』
コツ、コツ・・・
高い、ヒールの音かしら？・・・、
アリスは、目を見開いて混乱した。
”　アリスの姉　”　が、アリスに向かって歩いてくる。
「――・・・嫌よ、ねえ、アリス？」
「ね、え・・・さま・・・・？」
誰？　姉さま。
誰？　お姉様。
誰・・・？　私の、お姉様。

・・・・違う？　いいえ、これは――、
「だって、私は貴女が大好きなの。
大好きなモノは、仕舞っておくべき。違う？」
”　アリスの姉　”　が微笑んだ。
そして、アリスを撫でた。
「・・・・・・・あ、」
『貴女は、御姉様』　そういいかけた途端、
ドオンッ！
「アリス――――ッ！」
「アリス！・・・・大丈夫っ！？」
「アリス！・・・・大丈夫っ？！」
途端、上に穴が開き、光が漏れてくる。
そして、３人が、落ちてきた。
「・・・・え？　あ、　・・・・・・・・・・え・・・・？」
え、あ、そうか、私・・・。
アリスは、”　姉　”の方を向いた。
其処にいたのは、

「・・・あら、どうやって入ったの？」

ドレスを着た、見知らぬ美しい人間の姿であった。
その頭には、冠。

「あいつに手伝ってもらったんだよ。女王様？
ハイトに穴を開けてもらって、レンに『壁』を打ち壊してもらった」
「御行儀の悪い住民だ事！　でも、そのくらいが良いわね？」

―　アリスパート終了　―

「女王様・・・？　御姉様は？」
「私は女王の　カリーヌ。　宜しくね、アリス？
私は”御姉様”ではないの。　ごめんなさい。
先程の、”変化”は、狼特有の”魔法”ですの。」
「でも・・・・・」

此処で悩んで何になる？
アリスは受け入れ、正面を向く。

「・・・・・・・・・・・・どうしてあの姿に変化できたの？　教えて頂戴」
「あの人間ね。　この世界で1年前、貴女の世界で5年前。
あの人間、”アリア”は、この世界に来たのよ。
すごく、楽しくも忙しい人間だったわ！
だから、好きなのよ、　帰ってしまったけれど」

そう、アリスの姉はこの世界に来ている。
それを知ったアリスは、驚いた。
でも、特に”だから何”という感情は無かった、

「そう、・・・・有難う」
「ねえ、それにしても・・・　私はあなたが好きよ？
　このまま、ずっと此処にいない？」

戸惑うアリス。
やがて、落ち着いて言う。

「・・・・・・・・！
私・・・は、んー・・・・悩み中、でいいかしら？
私は、女王様も好き、　でも、元の世界の御姉様に会いたい。
だから、このまま、悩んで・・・・決める。
駄目？」
「・・・・・・・・・・・・そう、ね。
ええ、いいわよ。”超次元空間”わかるでしょう？
あそこから、向こうの世界へ返れなくも無いのだけれど・・・・。
でも、・・・・・。
なんでもないわ、　・・・よろしくね、アリス？」
「はい」

―　やがて　女王様のところへたどり着いたおんなのこは
元の世界へ戻るか　この世界にいるか
　その世界できめることにしました
　おんなのこの　最後の決断は？　―

不思議の国と。―少女と女王―（後書き）

有難う御座いました。
次回、最終話。

是非、見てくださいね！

不思議の国と。―少女と物語の始まりの終わり―（前書き）

第一章の終りですね。
一応、このお話は完結します。

これから更新していくのは、［番外編］です。
お姫様が出てきたり。

色々考え中です！

次作小説も企画中＊
是非、最後までお付き合い下さい。

不思議の国と。ー少女と物語の始まりの終わりー

女王と出会い、アリスはお城で暮らし始める。
ラビの家は、森を抜けたところにあるのだが、アリスの希望によって
アリスの泊まっていた部屋から超次元を通って城まで繋げた。

姫気分を満喫していた少女・アリスは、
たいそう女王様に気に入られていたそうな。

そんな、ある日の事。
朝食を取りに、食事場まで向かう。
城はとても大きく、部屋から食事場まで5分程度かかるのだ。

の筈なのだが・・・？
「・・・・可笑しいわ、笑っちゃう」
いくら歩いても辿り着けない。
食事場まで行く道を、何度も何度も繰り返し続く。

「全く誰の仕業なのよ・・・お腹空いたわ・・・」

「んー、基本的にあたしのせいかなあ？」
「？！」

目の前をふと見る。
視線の先に居たのは、銀色の髪の先を内巻きにしている、小柄な少女。
アリスには、見覚えがあった。

――どころか、その少女は・・・
紛れの無い、アリスの姉、アリア・ワンダーだった。

「お姉・・・様」
「アリス、元気してたあっ？」

それは、元気で、そして、明るい。
誰もが好印象を持つであろう、楽しい笑顔。

「・・・・・姉様・・・・・・・・・！」
アリスの瞳から、一粒の透明の涙が零れ落ちた。
アリアの笑顔が崩れる。
「どうしたの、アリス、大丈夫？」

「うん・・・大丈夫・・・姉様、姉様が居る・・・・」

安心。
その心を持つには、一人では無理。
誰か、信頼できる人物が居る。

アリスには、その人物が、アリアであった。
人間界では、いつも一緒に居た、親愛の姉。
優しくて、明るくて、楽しくて、元気な。
そんな、勇気をくれる、大好きなひと。

それを失い、また出会う。
アリスは、嬉しくて、嬉しくて。
食事の事なんか、全て忘れて、泣いた。
そして、涙が乾くと、笑った。

「姉妹愛の感動の再会は終わ、終わりましたか・・・アリア様・・・・」
ぷるぷる震えて出てきた、身長が１３０程しかない小さい男。
頭には、大きい冠。
この小さい男、こそが、ルーク王。　この国の王様なのだ。

「ええ、終わったわよ？　ルーク」
「王様・・・？　始めまして。　何故今まで会わなかったのかしら？
アリス・ワンダーですわ。　覚えて頂戴」

「あ、会えなかったのはカリーヌに禁、」

「あらアリア！　来てたの？　アリス、お早う？」

カリーヌ女王は、瞬間にルークの王冠を奪い取り、頭に乗せる。
そして、ルークの足をヒールで踏む。
「ひッ！？」
「ふふ、こんな主従関係もアリでしょう？」
カリーヌは微笑を浮かべると、足を上げた。

「ええ、勿論アリよ。

そうなの、来てたのっ？　愛しい妹がこっちの世界で行方不明だったんだもの！
若しかしたら、と思って？」

カリーヌは頷くと、アリスに向直る。
そして、真剣な顔になった。

「へえ・・・そうなの。
――、アリス」

「・・・はい」

「聞くこと、解ってるわよね」
「ええ、勿論。　・・・私を見縊らないで頂戴？」

アリスは笑った。無理のある、少し悩んだ笑み。

「・・・・・・・・・・・・どうするの？
・・・・・元の世界に帰る？」
「私は――、・・・・帰るわ、そうね。　帰らなくちゃいけない。
・・・・・・・また、遊びに来るわ。2日に1回くらいはね？」

アリスは、”　不思議の国　”　をくるくる見回す。
そして、とん、と足を着くと、少女は微笑する。

『楽しかった。有難う――、』

途端、アリスの目の前の世界がまるでパズルの様に剥がれ落ちる。
全てが無かった事の様に。
楽しさも、不思議も、全部。
でも、アリスは泣かなかった。
だって、いつでも行ける、
素敵な不思議の国だから。
アリスは、笑った。　そして、目を瞑った。

――――どれだけ目を瞑っていただろうか。
意識と、時間間隔が狂う。

そして、目を開けた其処には、

「お帰り、アリス」

不思議の国の、ラビに良く似た弟。
シャルにチェルシー、２人に良く似た友達。
女王に似た母に、王様に似た父。
楽しい姉に、
そして、アリス。

元の世界だった。
楽しく、幸せで、普通の。

「やっぱり、夢？」

そして、ポケットの中を見ると、兎の絵が描かれたコインが1枚。

「ああ、夢じゃないのね」

少女は、楽しそうに笑った。

「物語は始まったばかりだから」

そして、家族と友達に囲まれて、始めるのだ。

不思議な不思議な、御伽話。

”　不思議の国のアリス　”　を――――。

●おわり●

不思議の国と。―少女と物語の始まりの終わり―（後書き）

有難う御座いました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5759w/

不思議の国と。-少女と不思議な物語-

2011年10月20日09時13分発行